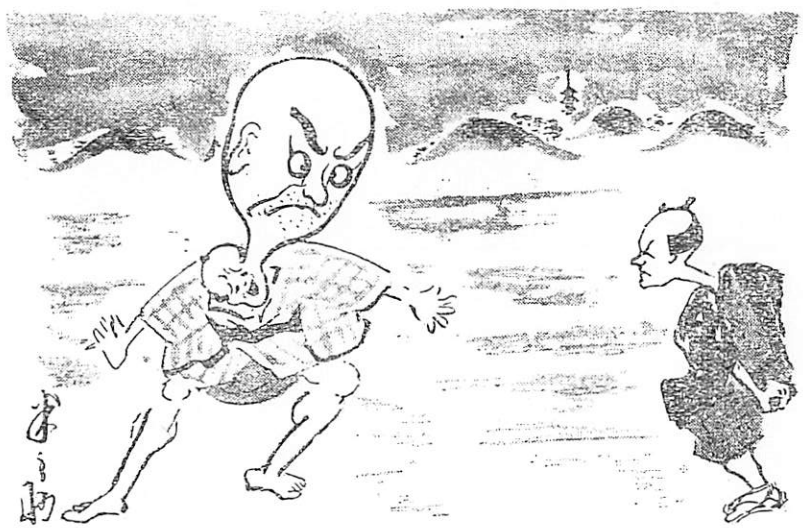
「何が一番好きだす」
「それは二番が酒だす」
「イヽエ、一番好きな物は」
「ハア、二番が酒や」
「イエ、一番は何だす」
「甚い云ひ悪うおますけれども、一番は、女だす」
「何を云ふてなはるね、貴郎は何が好きだす」
「私は興行物が好きだす、芝居でも淨瑠璃でも俄でも落語でも見たり聞いたりする事が至つて好きだす」
「成程、貴郎は」
「私は魚釣が好きだす」
「ヘェ、貴郎は」
「善哉や甘い物が」
「ヘェ成程、貴郎は」
「私は酸い物が好きだす」
「私は苦い物が好きで」

「何うも妙な物が好きだすな苦い物、矢ッ張り虫が好くとでも云ひますか、貴郎は」
「私はこの空消炭が好きだす」
「妙な物が好きだんナ、貴郎は」
「私は又壁土が好きだす」
「何だす」
「壁土だす」
「アノ壁土、ヘェー、何う云ふ壁土がお好きだんね」
「ヘェ如何なんでも宜ろしい、なるだけ古いのが宜いので、それが私の病氣でおます」
「ヘェ妙な物を好きなお方もあるもんやナ、併し貴郎それがほんまなら此の壁土毀つて食べたら如何だす」
「イエそんな事が出來ますかいな」
「イエ大事おまへん貴郎がお好きなら私が引受けます、土を毀つてあげます」
「ア、さよか、貴郎が引受けとくなはるのんなら、私よばれます、此の壁の取れかけてある所から大きに御馳走さん、こら中々旨ひ」

と調子に乘つて壁土を食べて居ります。傍に居た皆の者は呆れて見て居ります、其の内に皆は寢て仕舞ました。翌朝夫れ〳〵出立致しましたが、右の壁土を食ふた男は氣分が悪いと寢て居ります。其の翌日も頭が上りません。二三日逗留して居りますと、氣分も快うなりましたので、宿を出立致しました。宅は京都の綾小路麩屋町で人間が少々アヤフヤな男、宅へ歸りますと、其後右の肩へさして小さな疣の様なものが出來ました。それを何ぢやいナと思ふて引きちぎると、また其跡へニュッと出來る、引ちぎると出來る、段々大きう成つて來ます。遂には寢床に就いて居りますと、友達は親切なもので、
「オイ、在宅かへ」
「オウ清やんか、マアあがつて」
「何ぢや、何處ぞ悪いのかへ」